

良い学級集団を形成するためのチャレンジ運動を用いた体育の授業づくり
A consideration about the design of physical education classes by using Team Building
through Physical Challenges for forming desirable class

1K09B138-7 東海林 沙貴

指導教員 主査 吉永 武史先生 副査 友添 秀則先生

【序章】

近年、子どもたちの対人関係の希薄化が様々なところで指摘されている。子どもたちを取り巻く環境の変化からコミュニケーション能力が低下し、その結果、教育現場においていじめや不登校が依然として大きな問題となっている。このような問題に対して、まとまりのある学級集団を形成できていないことが原因の一つではないかと考えた。学校生活が充実したものになるか否かは、学級が楽しいかどうかが大部分を占めており、本来であれば、学級は「心の居場所」として機能するべきである。しかし、その学級がいじめの場や避けたい場となっていることには問題がある。体育という教科は、学校の教科の中でも唯一身体活動を伴う教科である。この学習過程においては、クラスメイトや教師など、他人との直接的な関わりが必要不可欠であり、この関わりが楽しさへとつながっていく。子どもたちの運動への態度の二極化や、体力低下が問題視されているが、体育の授業を通して良い学級集団をつくることのできるのではないかと考える。本研究では特に、仲間づくりを主な目的としてアメリカで考案された「チャレンジ運動」の有効性について考察する。

【第1章】

第1章では、集団から学級集団への変化について考察した。マズローの示す欲求階層説によると、人間には安全の欲求、所属・愛情の欲求、自尊・賞賛の欲求が存在し(西本ほか,2009)、人々はその欲求を満たし、心身の健全な発達のために、他人との集まりを形成するといえる。社会には様々な集団が存在するが、多くの研究者は「何らかの程度の相互依存関係にある2人以上の人々の集合」と捉えている(上里,2002)。この中でも、学級集団はいくつかの特徴を持っている。学級集団は一般に同学年の児童生徒で編成されるが、その大きな機能として、「教育的学習集団」、「教育的生活集団」、「管理運営の単位としての集団」の3つを挙げることができる(永岡ほか,1995)。学級が編成された

当初は、お互いの関わり合いもなく、単に同じ場集まっている子どもたちであるが、共同生活を通して一体感が生まれ、準拠集団としての存在へと変化していく。望ましい人間関係の確立は学校教育における目標の1つでもあり、学級づくりは重要なものであるといえる。

【第2章】

第2章では、より良い学級づくりのための理論的方策として、教科体育での目標と社会的行動目標について体育授業と学級集団の関係から考察した。学校教育において人格の陶冶と心身の健全な発達は大きな目標である。体育授業では、直接的なコミュニケーションやスポーツを教材とした学習によって社会性の育成が期待されている。先行研究により体育授業評価の向上は学級集団意識の向上につながる事が明らかになっており、さらに体育授業の成否が学級集団意識に影響することも明らかになっている(日野ほか,2000)。この結果から良い体育授業を展開することは、より良い学級集団の形成につながるものと考えられる。

【第3章】

第3章においては、体ほぐしの運動の概要とチャレンジ運動の概要をまとめ、チャレンジ運動を用いた単元実践例とともに実践的方策として考察した。体ほぐしの運動には大きく3つの目的がある。チャレンジ運動はその中でも特に「仲間との交流」をメインとした教材である。協力関係なしには達成できない課題にグループで取り組み、その集団的達成の喜びを実感することが目的である。子どもたち全員が成功体験を得ることができ、肯定的な相互作用が積極的に行われることで、楽しく温かい授業の雰囲気をつくることのできる(ミドゥラほか,2000)。チャレンジ運動を用いたこれまでの単元実践例をみると、子どもたちの体育授業への評価や学級集団意識への評価は当初から高かったが、単元を通してより一層向上していた。子どもたちの感想文の例を参照しても、チャレンジ運動が好意的に受け入れられ、効果的であったと考えられる。